

作付時期の遅れに伴う推定減収率

誌名	中央農業総合研究センター研究資料 =
ISSN	13471279
著者名	松村,修 千葉,雅大
発行元	農業技術研究機構中央農業総合研究センター
巻/号	6号
掲載ページ	p. 34-40
発行年月	2006年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



作付時期の遅れに伴う推定減収率

－ 水稻 －

Estimational yield decrease due to the delay of cropping season
- Rice -

松村 修・千葉雅大

Osamu Matsumura and Masahiro Chiba

水利施設や損壊水田の修復作業の遅れから、被災地における平成17年度水稻作付は、ところにより大幅な遅延が見込まれる。作付が遅延した場合にはある程度の減収が生じるが、ここでは晩植の場合の水稻の減収程度を検討する。北陸地域で水稻の晩植に伴う減収を物質生産の背景まで含めて精緻に検討した研究は、丸山ら (1985)⁽¹⁾による報告が代表的なものである。丸山らは晩植条件下での収量変化の定量化を、出穂期の推定並びに乾物生産予測式の作出と乾物分配の推定を行うことにより組み立て、平年気象条件下にあてはめて収量推定を行った。この結果、極早生系統を用いた結果ではあるが、平年気象条件下において、5月15日稚苗移植を100とした場合、1ヵ月～1ヵ月半遅れの6月15日～30日移植では23～24%の減収となることを示した(表1)。7月以降の移植については試算は行っていないが実験値からはさらに減収が大きいたことが示されている。7月以降の移植は、早生や極早生品種でさえも限界出穂期である8月下旬を越える9月出穂となり、収量・品質の大幅な低下が想定されるのであまり現実的ではない。したがって、作付時期は遅延したとしても6月中に行い、その場合の減収率は20%強と考えられる。

表1 平年気象条件下における収量の推定 (丸山 1985)

移植日	苗の種類	出 穂 期		推定収量* (kg/10a)
		W (g/m ²)	F (m ² /m ²)	
5月15日	稚苗	752	4.3	633 (100)
6月15日	稚苗	687	4.8	480 (76)
6月30日	稚苗	670	4.4	488 (77)

注) 普通植を100とした場合の比率 (%)
W: 乾物重, F: 葉面積指数

引用文献

- 丸山幸夫・田中孝幸(1985) 水稻の作期が生育収量に及ぼす影響. 北陸農試報, 27, 80-99